小学校三年の部　佳作

対象作品／大石真著『チョコレート戦争』理論社

「人を信じる心」

弘前大学教育学部附属小学校　佐藤理花

もしも私が桜井先生だったら、まずさいしょに、明と光一をうたがいます。なぜかというと、ショーウィンドウのまわりには誰もいないし、どうきもあるからです。どうきとは、光一がシュークリームを買えなかったことです。ですが、桜井先生はさいしょから明と光一を信じました。私は、桜井先生がどうしてそんなことをできたのかふしぎでたまりません。

この本の作者が伝えたかったことは何でしょう。私は、「人を信じる心」が大切だと言っている気がします。「うたがう心」も大事ではありますが、そればかりでは、友だちにきらわれてしまうかもしれないからです。人を信じるというのは、心が広いということだと思います。いつもわるさをしている人が、いつもわるいとはかぎらないからです。私も、そういう心の広い人になりたいです。

この本には、名言が一つあります。同じような言葉はほかにもありますが、この言葉にひかれました。

「まず、てきのようすを知ることだ。」

これは、光一の言った言葉です。かっこいいし、ほかのセリフよりなんとなくかがやいてみえたのです。私も、この言葉を日ごろからつかってみたいです。

本のさいごに、チョコレートのしろをぬすみだした光一、一郎、二郎、晴男ですが、ほんもののチョコレートのしろではないことを知り、ずいぶんはずかしかったと思います。金泉堂をこらしめるどころか、自分たちが店のせんでんをしてしまったのです。光一はくやしがるだけで、あきらめたけど、もう一どほんもののチョコレートのしろをぬすみだしてほしかったです。

私に、光一たちのようにチョコレートのしろをはこびだす勇気はありません。大人たちにおこられるのがこわいからです。もし私だったら、自分がやっていないしょうこをあつめて、こうぎしにいきます。

さいごに、ときどき私は、人をうたがってしまうことがあります。この本を読んで、「人を信じる心」を身につけよう

と思いました。